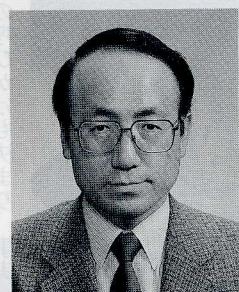


広島大学

新入生オリエンテーション・キャンプ

その過去と将来

前學生委員會委員長
井內康輝



新入生オリエンテーションキャンプ（以下オリキャンという）は昭和四十八年（一九七三年）、竹原市大久野島を会場として第一回が開催された。このキャンプ創設の趣旨は、昭和四十四年（一九六九年）の夏、東千田キャンパスへの機動隊導入によるストライキ解除を頂点とする大学紛争の反省に立つて、教官と学生との相互理解を深める場を提供し、かつ新入生の一部が抱える入学後の虚無感と孤立感、いわゆる“五月病”を防いで学生間の交流をはかることにあった。その後の七年間は大久野島を会場としたが、昭和五十五年（一九八〇年）からは宮島町包が浦に会場を移して続けられた。

運営は学生の構成する総局に委ねられたが、総局は毎年六月頃に体育会に属する学生を中心として結成され、おそらく一年間をその準備に費やし、これを学生部が全面的に支援する形をとつた。さらに予算についても文部省から全国的にみても特異で意義深い全学的行事との評価を受け、特別な補助を受けてきた。

キヤンバ
スへの統
合移転が
順次進み、
平成五年
三月には
総合科学
部の移転を迎えることとなつた。さら
に大学設置基準等の改正による本学に
おける教育・研究体制の改革が緒につ
くという状況となつた。

こうした期にあたり、主として教官
側からこのオリキヤンの運営や内容に
対する批判的意見が寄せられるようにな
り、それに応える形で、平成二年
(一九九〇年)四月の学生委員会にお
いてそのあり方が論議の対象となり、
平成二年十二月には、平成四年以降の
実施を検討する目的で学生委員会のな
かにオリキヤン検討小委員会が設けら
れた。この小委員会は第十九回オリキヤ
ン(平成三年)に際して、実施前、当
日、実施後に分けた詳細なアンケート
調査を行つたが、その分析の結果は、
オリキヤンは新入生については学生生
活への適応度が高くなるなどの好結果

を生んでいたが、教官側にはあり方の再検討を望む声が多いというものであつた。これをうけて小委員会は、平成四年（一九九二年）の第二十回オリキヤンは従来通り実施するが、平成五年度以降は学部別の実施を含め、再検討することを結論として解散した。平成四年一月、学生委員会は同年五月までに平成五年度オリキヤン実施の結論を出すこととし、学生役員との反省会なども実施したが、学生側からは役員の募集が難しいこと、また役員の負担が大きいことなど今後のオリキヤン継続にかかる問題点の指摘があつた。各学部の意見は各学部学生委員を通じて集約されたが、従来のオリキヤンの継続を要望した学部は経済、歯、工、生物生産の四学部であり、文、教育、学校教育、法、理の五学部は各学部単位でのオリエンテーション行事を望み、総合科学部、医学部は全学の決定に従う方針を出した。これらを踏まえて平成四年六月の学生委員会は、「従来のオリキヤンは廃止するが、各学部単位でこれに代わる行事を行い、オリキヤンの果たしてきた役割をさらに充実した形で引き継ぐことを望む」との結論を出した。この結論は部局長連絡会議及び評議会で承認され、ここに平成四年（一九九二年）の第二十回をもつてオリキヤンは廃止されることが決定した。オリキヤンの廃止に至る経緯を振り

返ると、その最大の要因は、創設当初の目的として掲げられた“学生と教官との交流の場”としての役割が次第に希薄となつたことであろう。二千五百名近くの参加者を集め、これまで事故ひとつなく実施されてきた背景には、神経質なまでの管理と統制が必要であり、これが運営を担う学生の大きな負担となり、教官との意志の疎通を欠く内容となつたことは否めない。オリエンテーション行事としてのキャンプが企画される際には、その規模を適正なものにし、その内容と運営方法について各学生、教官のもつ個性が十分に尊重されかつ生かされるよう工夫すべきである。この点から各学部単位でキャンプが実施される場合は、より理想に近い学生と教官、あるいは学生間、教官間のコミュニケーションをはかる場を提供することができよう。

全学で実施されてきたオリキヤンは、その使命を終えたが、大学の果たすべき教育的使命に変わることはない。今後、各学部別で実施されるオリキヤンあるいはこれに類似した行事においては、大学教官がより積極的に参加し、各教官の目指す教育的理念を大いに具現していただきたいと願う一方、これに参加する新入生諸君が、これら教官の姿勢を通じて、大学のあり方を学び、将来の方を探る一助としてもらいたいと思うものである。

運営は学生の構成する総局に委ねられたが、総局は毎年六月頃に体育会に属する学生を中心として結成され、おそらく一年間をその準備に費やし、これを学生部が全面的に支援する形をとつた。さらに予算についても文部省から全国的にみても特異で意義深い全学的行事との評価を受け、特別な補助を受けてきた。